

ワークス研究所「近未来」を研究する意義



渡辺三枝子
Works Review編集委員
立教大学大学院 ビジネス研究科
教授（特任） 総長室調査役

ワークス研究所が2011年度の研究テーマとして、「近未来の人と組織」を設定したのは2011年3月11日以前のことであり、研究員の方々は「人材開発のこれから」についての研究のまとめに没頭していたころであったと想像する。そして「近未来」の課題解明に向けた研究プロジェクトに取り掛かったときは、大震災、津波の結果がわれわれの日常生活に予想もしなかった複雑な影響を及ぼしていた。直接自然災害と人的災害を体験しなかった大半の国民も、間接的に恐怖感を体験し、もはや未来という時間の存在を考えられなくなったり、未来に備えることを空しく思ったり、愕然とした不安に苛まれた時期だと思う。また研究者の「想定外」という発言で、研究の無力、無意味と評した人も現れた。

このようなムードの中で「近未来」に焦点を当てることは勇気のいることだったのではないだろうか。しかし目の前の問題対処に多くの人の関心とエネルギーを注がれている時だからこそ、「未来、近未来」を考えて、複眼的姿勢をもって、冷静かつ批判的に現在を把握することこそ、研究者の良心であり、社会的役割であると思う。

大久保所長に、「なぜ2020年までと時間を区切った研究という方針を決定したのか」と

同時に「もし東日本大震災が半年早く起きていたら、2011年度のテーマは別のものとなっていたかどうか」を尋ねてみたい気もする。しかし、2010年度のテーマが「人材育成のこれから」と、やや漠然とした時間帯を研究の対象とした経験と成果から、2011年度は「予測可能性の高き近未来」に焦点を当てる必要性を認識したのではなかと推測できる。その推測をさらに発展させて、近未来に取り組んだ意義を次のとおりに推察する。すなわち「ワークス研究所は、もともと人も組織も歴史を背負って現在に至っていることを考えれば予期せぬ環境の変化の影響があることは想定内である。かえって時間的スパンを視野に入れることこそ、実務に役立つ研究の果たす役割だから、東日本大震災という自然災害と人的災害で、研究プロジェクトのテーマを変更するはずはない。むしろ、こういう環境だからこそ、アカデミックなアプローチをもって未来を研究しなければならない」と。

私の推察は根拠のないものではない。複数の研究プロジェクトが「近未来の人と組織」というテーマに取り組み、その結果の一部を論文に仕上げる一連の研究過程を研究員と共にした私の体験に基づいている。本誌に掲載された11編の論文と事例報告は、みな現状を描写するだ

けにとどまらない。むしろ現状分析から 2020 年までの課題と解決の探索をしている。「現在のなかに変化の兆しをとらえる」という近未来研究に必要な姿勢を持っていることが、論文構成（問題設定の視点、研究の目的と分析方法の絞り込み、そして考察の論旨など）に明確に反映されているからである。

その例を挙げると、まず、研究目的の設定に当たり、既存の時系列的な統計資料（年齢階層別人口統計、若者の進学率、労働力人口の推移）を用いていることを指摘したい。研究として当然のことであるが、最近この過程を無視する研究が少なくないからである。なかでも、他機関による収集の統計データを自分の仮説に則って再分析することで、近未来の問題を予測した戸田氏の論文や、過去の関連研究の精査から仮説した変化の兆しを検証することで近未来に提言した村田氏の事例研究等は、古典的な研究技法の価値と意義を再認識させてくれる論文であると思う。

その他の研究論文も、過去に発生し、現在も解明されていない「問題」（例：内定取り消し、若者の職場定着問題、社会人と学習の意味、グローバル化する企業の人材育成、65 歳定年延長下での高齢者の就業意欲等々）から出発している。また研究対象を焦点化することで、結果の曖昧さを削除する努力をした。たとえば、職業人の勉強会参加行動の意味とキャリア構築の関係の研究（30 から 40 歳代の中堅層に焦点化した豊田）、学校から社会への移行の初期条件の解明（高校卒の 6 年目の就業者に限った辰巳）、採用活動の在り方について（採用辞退者に限った徳永）、シニアの終業幾区の研究（60 歳以上の就業者で定年経験者に限定した笠井氏）等である。

社会科学は、歴史という時間的経過と多様な文化・文明とが絡み合っ作りだす社会現象とそこに生きる人を対象とおり、絶え間ない変化は現象の複雑さが増幅されることをも意味す

る。したがって、社会科学は絶対的な真理の追求よりも、確率の高い平均像を見つけることで社会の諸側面の特徴をとらえることを役割としてきたと思う。しかし、未来は現実ではないので、「平均的で、出現率の高い事象を見つけるのではなく、平均像とは異なる変化の兆しを見つけこと、むしろ未来は平均から外れることの中に見えるかもしれない」。

もしその視点が正しければ、研究へのアプローチを変えることが求められているのかもしれない。丁寧に、しかも多角的に、かつ批判的に現在の状況を観察する姿勢、変化に気付く観察力と思考力、が求められる。もう一つは他分野の研究に心を開くことであろう。

本誌の論文は、まだ研究テーマの解明に到達したわけではない。ただ、年々の研究とその検証を積み重ねていく継続的研究のための具体的テーマと方向を見出す役割を果たしたことは確かである。本誌の論文が、変化の激しい社会環境における研究の意義を提示したという意味でも意義がある、というのが社会科学に身を置く者の感想である。